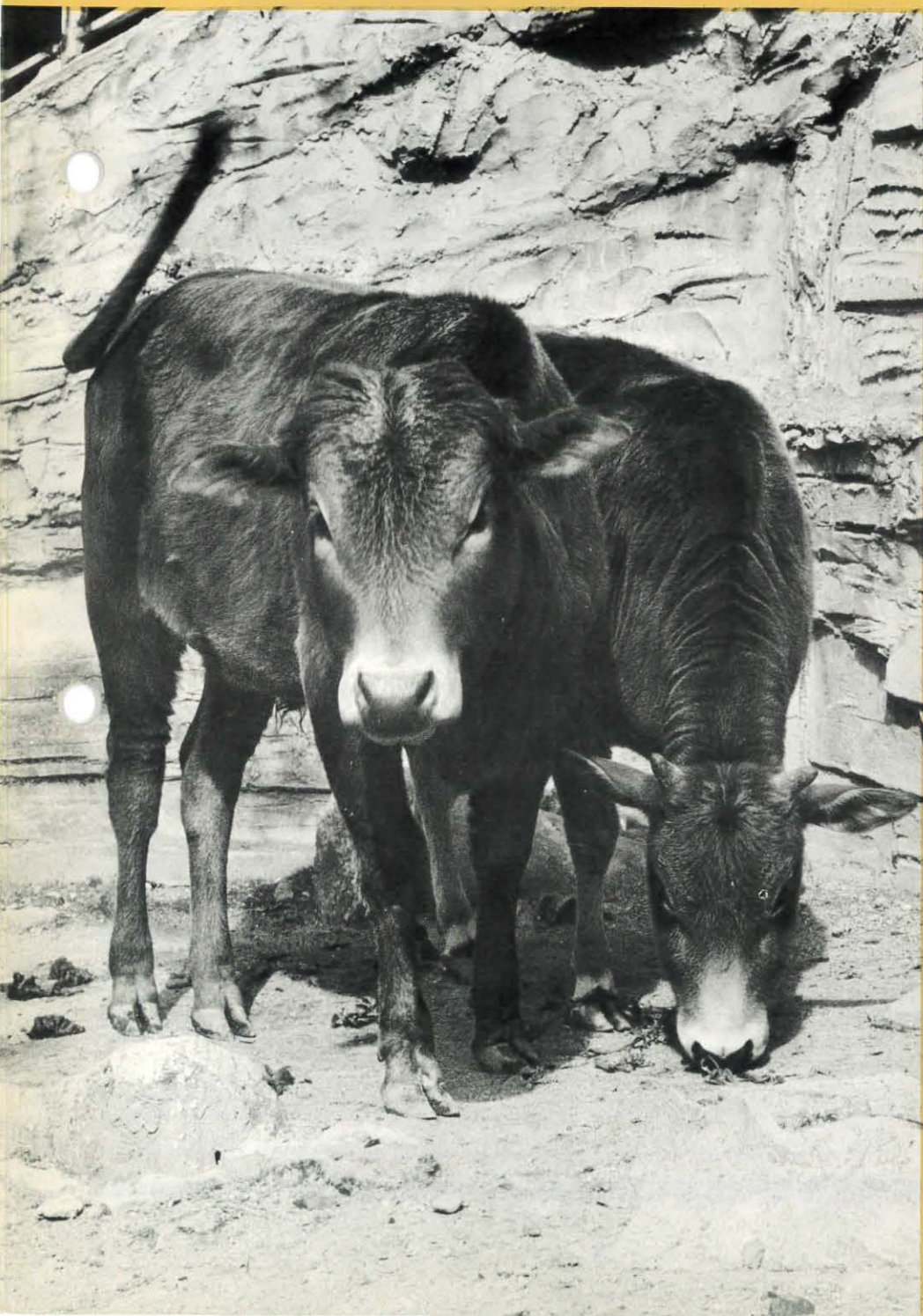


なきごえ



1973

1

大阪市
天王寺動物園協会

私と動物

ノアの箱舟に乗ったパンダ

加藤 一男

地球上の野生動物が、次第に減ってきているといわれている。絶滅しかかっているものも数多くあるようである。そのために、禁猟区をふやしたり、広い地域を野生動物の特別保護区域としたりして、保護、保存に一生懸命になっているわけであるが、最近では、野生動物が減少してきたのは、人間が、むやみやたらに、殺したからではなく、人間がした自然破壊の方が大きい原因であるとされてきた。その例として、ケニアの野生動物のための天国、自然動物園内の動物の変化があげられている。

ここでは、動物が住んでいる自然をそのままにして、人間に荒されることから守っていることで有名であるが、いつの間にか、象が異状にふえて、反対に、バッファローが目立って減ってきているといわれている。

このことは、動物は、まわりの自然の変化に従って、減ったり、ふえたり、或は絶滅したりするもので、自然がコンスタントであれば、動物たちも自然の法則に従って変化がない筈であるが、実は、このケニアの広大な自然は、作られた自然で、ほんとうの自然ではなかった。

即ち、動物たちに悪い影響を与えるものは取除いてやったり、食糧が無くなれば補給してやったりしたことが、自然を破壊したと同じ結果になったことを意味している。

ところが、今や、この地球上には、自然の空も、水も、緑もなくなり、大なり、小なり人間の影響を皆、受けて、原始の自然は破壊され、変化を続けている。このような、にせの自然に動物を置いたならば、いずれは、動物の世界も変化するのはあたりま



えである。固定された原始自然を失った地球上に、動物をいかに保護して、育てても、変化している自然の淘汰をうけることになり、危険である。地球上に今

生きていた動物の種族を永久に消失しないようにするには、ノアの箱舟に収容して、特別な飼育をしなければならぬのではなからうか。この箱舟の役目をするのが、今後の動物園の使命であるような気がしてならない。そのためには、世界中の動物園が協同して、手わけして、それぞれの動物の種の保存を図る必要が痛感される。もう動物園でなければ、この地球上の他の場所には生息しないものが、そろそろ、現われてきている。こうのとりのパンダも何れ、そういう運命にあると思われる。中国が、今や絶滅しか、っているパンダを、全世界のかけがえのないものとして、永久に保存するために、万が一を心配して自分の国だけで飼育せず、世界のノアの箱舟に分散させようとして、その一つとして日本に預けたと思うのは、思いすごしであろうか。

あの気違いじみた歓迎も、見せ物としてではなく、この意味であれば、大いに結構なことである。

(大阪市公園部長)

なきごえ1月号もくじ

私と動物(ノアの箱舟に乗ったパンダ).....	2
今年の願い・新年に寄せて.....	3
世界のウシ.....	4・5
牛にひかれて.....	6
サンディエゴ動物園の思い出.....	7
動物園グラフ(牛のおもちゃ展から).....	8・9
家畜としての牛.....	10
動物記者の目(子供動物園の建設を).....	11

表紙の写真説明

“ゴビトコブウシ”

セイロンなどで、家畜として飼われている。ゴブウシは、アフリカやアジアの熱帯から、亜熱帯にいて、暑さ、湿気、乾燥に強いのと、寄生虫や病気に抵抗力があるので、非常に重宝がられている。

今年の願い

中川 道朗

皆さん、明けましてお目出とうございます。

昨年は、開園以来という「ベビーブーム」と、「小人無料化」に伴って、入園者が激増し、300万人以上の人々が、憩いと安らぎを求めて、動物たちを訪ねてこられました。

自然から遠ざかる町の人々にとって、或は、子供たちの情操教育の場として、今後、益々この傾向は強まるものと思われま

す。園内も、かつてのオリ式から、放飼式に改造され、動物たちは、毎日、元気に跳びはねておりますが、都市動物園として、もっともっと緑と花がほしいのです。

そこで、今年こそ、「花と緑の環境整備」に重点を置いて、「お弁当広場」や「ファミリー広場」、或は、又「桜とツツジの広場」などを各所に設けて、入園者に花と憩いの広場を、提供したいと思ってい

ます。

青く広々とした芝生の上で、家族や園児たちが揃ってお弁当を食べ、遊び、寝ころんで憩える場所……。そして、春にはサクラが咲き、ツツジ、フジ……と四季折々の花や、草花が園内を埋め尽くしているという、美しい園にしたいのです。

動物園は「生きた図鑑」です。

動物たちの幸せを願って、健康ですこやかに、一頭でも多くの赤ちやんが生まれ、その可愛い姿を見て戴けるよう努力すると共に、外国動物園との交流も積極的に行ない、より多くの珍しい動物たちを、集めたいと思っています。

「木と花と動物が一パイ」

これが私の今年の願いです。

美しい動物園を目指して、皆様方の暖かい御指導と御支援を、心からお願ひ申し上げます。

(大阪市天王寺動物園長)

新年に寄せて

中馬 富美子

新年お目出度うございます。

いつもながら、ご無沙汰ばかり致しております。日頃は、協会のため皆様方のご支援をいただいておりますことを、衷心より感謝致しておる次第でございます。私ごとながら、「光陰矢の始し」で、主人が伸びゆく大阪市に、数多くの夢を託し、故人となりまして、早や一年が過ぎたのであります。

私は、せめて動物園協会を、市政のつながりの一端と思い、微力ながら発展につくしたいと存じております。

昨年、4月1日から、小人無料化の実現に伴いまして、一層、愛される天王寺動物園として、入園者

が激増し、協会は、入園者サービスに遺憾なきように、勉めておる次第であります。市に於きましては、予てから人間と動物との心のふれ合いの場である、「こども動物園」の計画も、進められているように、伺っている次第でございます。尚、当協会の新年度、計画の中に、動物の面白い習性なり、生態が動物を見ながら説明を聞く、動物自動説明機の取付けを行ない、入園された方々に、もっと動物知識普及のため、動物園事業に協力致したいと、目下検討中であります。

どうか、この上共、ご支援下さいますようお願い申し上げます、新年の挨拶と致します。

(大阪市天王寺動物園協会々長)

世界のウシ

小原秀雄

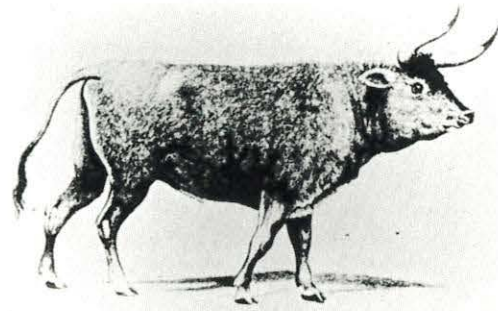
飼うウシは、世界に多数の品種がいる。角がなかったり、太くて長くなったりし、乳房が特に大きくなったり、体がよく肥えていたりなどの様々な変化が多い。肩にこぶがあるコブウシもいる。

品種は、人間が動物をいろいろの形に変化させたもので、もう絶滅してしまったオーロックスがもたらしい。オーロックスは、角が大きく、体も大きいウシだった。ジュリアスシーザーが、ゾウに近いほどの大ウシだといったというほどだ。比べるゾウが、北アフリカにすむ小型のものだったのだから、それほどではないにしても、ともかく相当の動物だったらしい。

オーロックスは、中世まで、主にヨーロッパで生きていた野生ウシだった。もう1種、ヨーロッパには、今でも少し残っているヨーロッパバイソンがいる。ポーランドやソビエトで、いったん完全に野生で絶滅したのを、動物園に生きていたものをふやし、森林に放して、回復させたものであった。

ヨーロッパバイソンの運命に似ているのが、アメリカバイソンである。北アメリカにいたアメリカバイソンは、数千万だった。豊かな大草原は、多数のバイソンを養っていた。群れは、草原の草をはみつつ移動する。豊かな草原の草を、バイソンは部分的に葉を食べ動いて行く。オオカミは、バイソンの天敵であり、バイソンを追ってくるので、バイソンは移動する。草を食べつくし、土を踏み固めずに動くので、草原は維持される。こうしてバイソンと草原とは、豊かさを保っていた。19世紀に入ってから、アメリカバイソンは射たれ、狩りつくされて、飼うウシが導入される。草は食べつくされ、土地は荒れ果て、砂漠となる。有名なユニオン・パシフィック鉄道の建設により、バイソン狩りは、いつそう機能化し、わずか100年未滿で、数千万のアメリカバイソンは、ほぼ絶滅した。今は、飼われていたものの残党である。

アメリカバイソンは、頭から前半身を長いまき毛



(オーロックス)

を備えた、重厚な野生のウシである。その長い毛は、フードの役に立つという。ヨーロッパバイソンは、アメリカバイソンよりも四肢は長めで、腰の下がり方がわずかである。

オーロックスやバイソンは、北半球にいたが、人間の文明の力が最も強く及んだためであろうか、ウシ類の中では、最初に斜陽とたつた。

もうすこし南へ行くと、チベットの高原を中心に、ヤクが生息している。腹の下に長い毛がはえ、坐るときに四肢を中に折りこんで、座ぶとんとなる。雪や氷の世界にくらすのに適している。これも、数はごく少ない。家畜のヤクは多いが。もつと南へ行くと、インドからマレーなどの林にガウルがすむ。額と四肢が白い巨大な野生ウシだ。インドの東部から、スマトラやボルネオ、ジャバには、主に草原にすむバンテンがいる。バンテンは、やや茶色つぼく、少し小型である。同じような地域の川や、沼などの水辺にくらすのは、スイギュウである。長大な角が、半円を描き、体も大きい。ガウルとほぼ同じ大きさだが、四肢がもつと太くて、がっしりしている。や、スイギュウににているタマラオは、フィリピンのミンドロに、アノアがセレベスにすむ。これらはみな小型で、角も短い。くびは長めで、カモシカなどに似てもいる。これもみんな極めて数が少ない。スイギュウは、地中海沿岸から東南アジアに、広く飼育されており、オーストラリアなどにも飼われている。オーストラリアに飼われていたスイギュウは、野生化もして、かなりの勢力にもなっている。

いったん人間がウシ類を狩り立て、家畜にするが、食べつくしてしまったものが、もう一度野生になったりしている。真の野生スイギュウはごく少ない。

数少ないといえば、インドシナのクウブレイは、ほぼ200ともいわれている。絶滅のおそれが一段と厳しくなったのは、ベトナム戦争のためである。

1937年に発見された、この巨大な灰色の野生ウシは、発見当時から、もう少なかった。熱帯に野生ウシが多いのは、それなりに食物になる植物が多いからだろう。

最も多い野生ウシ類は、アフリカスイギュウである。全アフリカで300万頭といわれる。

アフリカスイギュウは、ふつう草原にすむ黒色で、大型の重厚なもので、赤褐色で、角も短いものは森林にすむものである。これを、別の種に区分する考え方もある。中間地帯には、中間的なものが見られるというが、わたしが、ウガンダのクイーン・エリザベス国立公園という、エドワード湖辺にいるアフリカスイギュウを見たところ、赤褐色のものも、黒色のものとまじっていた。これらの種のちがいは、はっきりとしない。

こうしてみると、ウシ類は、人間に追われなければどちらかといえば、世界に栄えているものである。ウシとウマとは、代表的な草食獣だ、だが、この両者はかなりちがう。ウマは奇蹄目で、ウシは偶蹄目、このちがいは、遠く祖先の分れが、暁新世よりも前なほどにさかのぼれる。つまり、哺乳類のなかまが分れる最初の頃から、もうウシとウマのなかまは、別々の進化のすじ途をたどったということらしい。

奇蹄目は、体の重心が1本の指を通る。だから、同じ大きさの蹄が、左右に分かれるといったしくみにはならない。一方、偶蹄目の方は、左右に分かれて、重心がかり、少なくとも1対の、ほぼ同じくみの蹄が体を支える。

ウシのなかまもウマも、草原にくらしているので、このちがいの意味するところは、余りよくわからない。けれども偶蹄の方が、奇蹄よりふんばりがきい

て、むきを変えたり、沼地を歩いたりするのによいことは、確かであろう。

世界中を見てみると、種の区分のしかたは、学術でいろいろにちがうが、ウマのなかま(ウマ科)は、7~8種、ウシのなかま(ウシ科)は、130種以上もある。もつともウシという定義も、このような場合には、相当に拡大したものだ。種が多いだけに、いろいろに分かれ、ヤギ・ヒツジもウシ科だし、ニホンカモシカや、ジャコウウシもそうである。シカのように、優美なレイヨウもウシのなかまだ。

ウマのなかまには、シマウマとロバとが入り、真のウマというのは、家畜のウマのほかに、ノウマだけである。このノウマも人によつては、別種としないこともある。ノウマは、今ではモンゴルを中心とした地域に、部分的に生き残っているだけで、そういった点で、ウシ類に比べてウマ類は、実にかすかにしか生きていない。

ウシ類が、ウマよりも栄えているのは、蹄のせいではない。むしろ、胃のしくみからだろう。ウシ類の方が、ウマよりも消化器管がよくできている。反芻のしくみがそうだ。植物を、こうして巧みに消化している。ウシの糞は、よく消化されていることがわかる。べつたりとしていて、せんの多いウマの糞とはちがう。

このような植物の利用のしかたのちがいが、ウシ類の栄える根拠の一つである。食いもどしができるのは、植物をいそいで食べて、胃の中に入れ、その後でねて、ゆっくりとかみ直しをするのである。これはウマなどより、生活の上で、はるかに利点があるといえるだろう。こういつたウシのグループの中で、最も大きくて、優れた体つきになったものが、野生のウシたちなのである。その中でも、大型なのがいく種もあり、特殊なものは、人間に利用されたり、開発のあおりを食って、絶滅しそうなのである。

(女子栄養大学教授 動物学)

牛にひかれて

吉田平七郎

△牛に曳かれて善光寺参りではなく、燈台下暗し大阪四天王寺の境内に、半年の新春を飾る石神堂が残されていた。場所は新宝物館の北側に在る小さなお堂で、石神様と呼ばれている。牛の絵馬がたくさん奉納されていて、お堂内には、かなり古びた大小の牛が左右に並び、御本体は牛の化身した石神様だというが、これは外からは拝めない。石神様を牛神様という人もある。縁起は1370余年前、聖徳太子が四天王寺建立の当時、石材や木材を運搬するに専ら牛の力によったので、其使役中に仆れた犠牲も少なかった。そこで、聖徳太子がそれらの牛を供養するため、ここに建てられたものであるという。現在は、牛が草を食うので、瘡や腫物の治癒祈願に参詣する人が多い。しかし私は、これは動物園にもある、動物の慰霊碑の日本における元祖に値するものと、高く評価したい。動物愛護史上の第一頁を飾る貴重な資料で、牛年に当り全国的に紹介しておく。

△各地の天神さんには、臥牛、撫牛があり、牛乗り天神の人形もあって、その由来を確かめてみた。今日、天満天神といえば、菅原道真公のことになっているが、本来は、天神すなわち天の神を祭ったものであったのが、平安時代の中頃から、天神が菅公になってしまったもので、それは非運な晩年を送った道真の怨霊が、雷となり祟ったので、それを鎮めるために、京都の北野天神に祭られた。そこで、天神、雷神と道真が結びついたもので、天満大自在天神は白牛に乗っているの、当然菅公が牛に乗り、牛がお使になったものである。北野天神縁起には、もう一ヶ所にも牛との奇縁が述べられている。菅公が筑前の配所で、空しくなられ、四堂の辺に墓所を定め、牛にひかれて、送葬の途中、肥満多力をつくし牛が一步も進まなくなると、余儀なく其処にある安乗寺を墓所にしたとある。世界では菅公の生誕が、承和12年乙丑6月25日という牛年であったからというのは、余り意味のない薄弱な俗説である。

△歴史上の人物で、もう一人西行法師と牛の逸話が珍らしい。西行さんが東国行脚の時、ある夜、人家の軒端をかりて宿泊していたが、夜深けて賊がその家の牛を盗み去った。夜が明けて牛がないので、てっきりこの旅僧が盗んだものと疑われ、たたかれようとしたので、「我は西行なり、許せ許せ。」と白状したが、「まこと西行なら名高き歌人、一首の歌に十二支を詠めば許すべし。」といわれて、即座



(天王寺の石神堂)

に西行が「午未、申酉戌よ早く亥子、丑寅ぬさえ卯き名辰己に」と見事に答えたので、牛の持主も大いに感嘆して、危い難をのがれたという。伏見人形に富士見西行あり、盗難除になっているが、とらぬがとられぬ呪いになり、西行がガードマンにまでなっているとはおもしろい。

△泥棒よけとは反対に千客万来、一度くれば再三来るようにと、縁起を祝う風習が今も大都会で見られる。ちょっとした小料理屋の門口の敷居の上に、盛り塩をしていることがある。寄席などでも見かけたものだ。これは、中国伝来の故事をまねて、あやかろうと念願したもので、話というのは唐の玄宗皇帝に数多の後宮があり、女たちの争いをさけるために、牛に乗り、牛が歩いて行きつくまに、一夜を明すことにきめたが、どうしたものか牛は毎晩連続して、特定の家に王をはこんだ。というのは、賢い女がいて(揚貴妃の前身)、牛の好物である塩を、ひそかに門口においていたからであった。これは、日中間の古い交流を物語るひとこまで、牛年のクイズ問題になる。

△今は、昔都大路の牛車が、カーやトラックになり、スピード化を謳歌しているが、牛は大地をふみしめて、一步一步前進することを学びたい。もうひとつ牛が反芻して、50~80回かかみこなすことを思出してほしい。情報過剰時代に、何んでも鵜呑みしている人が多い。どんな些細な問題でも、一応かみしめてよく味ってみることが、特に現在誰にも必要だと、牛になり代って強調しておきたい。

(おもちゃの動物園長)

サンディエゴ動物園の思い出

大塚建一

サンディエゴ動物園は、サンディエゴの中心を占めるバルボア公園の中にあり、およそ1700種5000近い動物が集められており、世界的に有名な動物園の一つである。

訪れたのは、3月下旬すきとおるような青空に太陽がかんかん照りつけ、桜の花が咲きほこり、平日にもかかわらず、家族づれや観光客がいっぱい詰めかけていた。

園内は、広大な敷地に高低をうまくとり入れた立体的な造園で、緑が多く、その規模の大きさに、まず驚いた。鳥をみたいという親子づれと一諸に、大ケージ(金網)の中に入ると、木々がうっそうと繁り、滝が落ち、小川が流れ、目の前を飛んでいく鳥がいるかとおもえば、えさをつついている鳥や高い木の上で居眠りをしている鳥もおり、小川に添った小径を下ると出口に出てきた。動物園では、鳥は金網の外から見るものだとばかり思い込んでいたので、自然に近い環境の中で楽しみながら鳥の生態を観察できる大ケージには大へん感心した。

また、猛獣ショウをやっていたが、これもちゃちなショウではなく、ライオンやトラといった大物がたくさん登場し、子供ばかりでなく大人も大ぜい詰めかけており、大変人気を呼んでいた。

しかし、中でも一番印象に残ったのは、充実した子供動物園である。

園内に入ると、色彩もあざやかなオームやリス猿がぶら下っており、通りぬけのできる鳥舎、廿日ネ



(かわいい動物とスキンシップ)

ズミの家や、イースタエッグを形どったふくろうの家がある。次に、かどを曲ると、柵の内側に堀があり、その向こうに象やライオンの



(かわいい動物とスキンシップ)

に入る。

さらに進んでいくと、シカ、ラマ、羊、ブタ、うさぎ、ニワトリ等が放し飼いにされている囲い場に出てくる。ここは、子供たちに最も人気があり、動物にえさをやったり、なでたりし、動物と自由に楽しく遊べる場所である。

このほか、子供動物園には、親に捨てられた赤んぼのサルとか山羊を、飼育係の人が哺乳ビンで育てている様子がガラス越しに見える保育室があり、さらに、10~15人位のグループごとに動物の生態について教育的なプログラムをやる子供劇場も持っている。

園内は、入口から出口まで一方通行で、子供たちが「次は何かな!」と期待に胸をはずませながら、どんどん進んでいくうちに、いつのまにか出口にきてしまうというように、いろいろと趣向がこらされている。

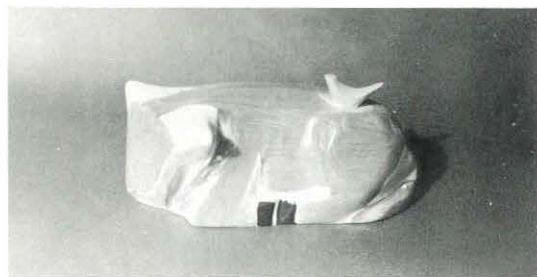
このアイデアに富んだ子供動物園で、子供たちがかわいい動物と目と目をみあわせ、ときには動物を追いまわし、幼い頃から動物に対する愛情をはぐくみ、また、大人もしばし童心にかえり、子供と共に楽しく過している様子を見るにつけ、近い将来、大阪にもこのような充実した子供動物園をぜひ実現させてほしいと思った。

大阪の子供たちが、動物と自由に遊ぶよき場が与えられ、喜々として動物を追いかけて、かたわらで目を細めてながめている幸せそうな母親の様子がふと目にうかんだ。

(大阪市総務局秘書課外事課)

動物園グラフ

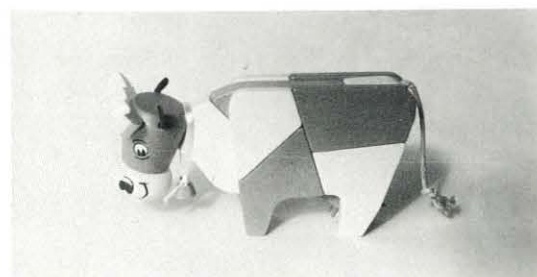
“外国”



↑スペイン(牛と小鳥の共生)

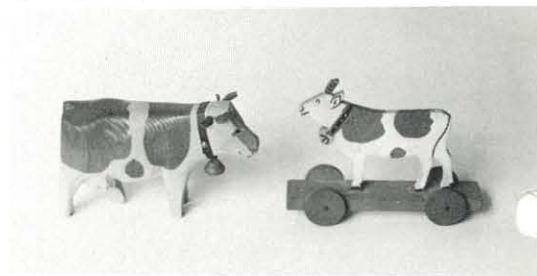


↑インドネシア(コブ牛)

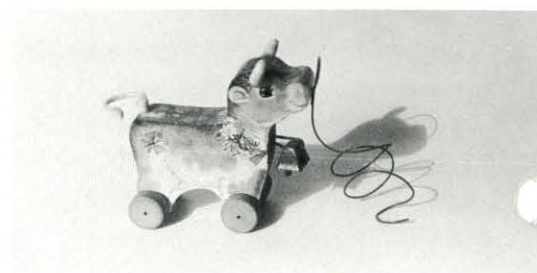


↑西ドイツ(牛の組合せパズル)

↓スイス(アルプスの牛)



中国(ヤク)→



↑アメリカ(ベルが鳴り、尾が回る)

↓埴輪の牛



←善光寺の布引牛



↑伏見の俵牛

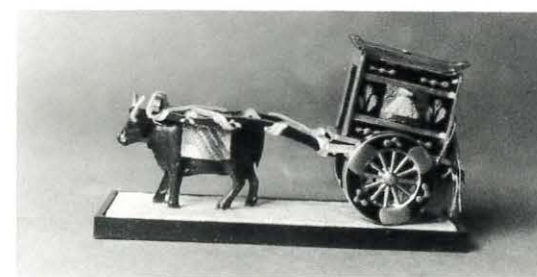
“日本”



↑牛乗り天神(伏見と提)



↑沖縄の闘牛



↑京都の牛車

“牛のおもちゃ展から”

恒例の干支にちなむおもちゃ展を、1月1日から15日まで催しますが、その中から外国と日本の牛のおもちゃを、ご紹介します。出品者は、おもちゃの動物園長の吉田平七郎さんです。

12月の動物園日記

1. キリン舎に、この日から夜間の暖房を入れはじめました。
2. 放飼中のフラミンゴの風切り羽根が伸びてきましたので、飛び出さないように切ってやりました。また、今年ふ化したキューバフラミンゴの脚に、認識リングをはめました。ワラビーおすが、黄疸で死にました。
3. キリンのめすが発情し、交尾を確認しました。分娩後3ヶ月余りです。
6. キョンのおすが、骨折の治療中でしたが、惜しくも死にました。
7. 1時収容舎に入れていた、今年ふ化のキジ類を、放養舎に移しました。
8. カナダガンなど、雁鴨類3種8点が、動物交換で入園しま

9. エチオピアから贈られたライオンに、2度目の赤ちゃんが生まれました。赤ちゃんは2頭で、いずれもめすでした。哺乳も確認していますので、元気に育つでしょう。
10. スカンクが、寒さのため食欲がなくなり、死亡しました。ベンチの寄贈があり、250脚が園内におかれま
11. ヌートリアの子2頭が、突然口から血をふいたり、ふるえたりして苦しみだしたので、動物病院で手当をしましたが、1頭は助かりませんでした。
12. イワトビペンギンの足に、まめがで、歩きにくそうにしていますので、治療をしています。
13. 園内の花壇に、正月用の葉牡丹(500株)を植えました。クモザルのめすが、大腸炎のため死にました。
14. 今冬第1回目の、ニューカッスルの生ワクの授与を行ない

- ました。例年、キジ類を主に来年3月まで、4回ほど行ないます。
15. いぼいのししのおすが、脱肛をおこしました。オランウータンのユキちゃんが、消化不良を起して治療を受けています。
16. いぼいのししが、死亡してしまいました。膀胱結石がたくさんあり、尿道につまって尿が出なくなり、膀胱が破裂してしまいました。
18. キョンのめすが、同居中のラクダに噛まれたのが、骨折して死にました。大阪市と、サンフランシスコ市との姉妹都市提携15周年を記念して、タヌキ2頭が、サンフランシスコ市に贈られることになり、大阪空港から出発しました。お返しとして、今年3月にダマシカ2頭が、贈られる予定です。

19. オリックスのおすが、他の動物を角でついて、傷めないように、角の先を少し短く切り落してやりました。
21. エランドのめすが、入園しました。“干支に因むおもちゃ展”の飾りつけと新聞発表を行ないました。また、来年のエトの牛舎には、鏡もちとしめなわが、飾られました。
22. 動物たちのクリスマスパーティを、行ないました。幼稚園児たちが、オランウータンのユキやさつきを囲んで、ツリーを前に、おいしいクリスマスケーキをたいらげました。
24. 日人止柵のペンキ塗装を始め、迎春準備にかかりました。ファンボルトペンギンが、急死しました。胃の中から、10円硬貨やボタンが、出てきました。
25. くらかもしかのめすが、急死しました。

家畜としての牛

井上 定幸

我が国における牛の飼養についての歴史は、はっきりしないところが多いのですが、神代から役用、すなわち、田を耕したり、重いものを運搬するために使っていたといわれています。また牛の乳を飲むようになったのは孝徳天皇の時、宋の人、福常、が我が国に帰化して、搾乳技術を伝え、これが牛乳を利用するようになった始めと言われています。

その後、文武天皇の時に大宝令が公布せられ、農業の発達には牛が必要であると言う考えから、その飼育を奨励され、また一方では元明天皇の時に山城の国、今の京都府下で牛の乳を利用して煉乳、および、今のバターのようなものを造らせて朝廷の用に使われたと言われています。平安時代になりますと、牛は牛車として貴族の乗物とし、また戦国時代には戦争の時の荷物の運搬等に荷車として利用されました。その後、明治時代までは主として農耕用、運搬用に利用されていましたが、明治維新後、乳用牛が外国から輸入され、役用牛は在来の和牛に、輸入した肉用牛を交配して、役肉用牛として改良されてきました。それ等が現在全国的に飼っている乳用牛、肉用牛であります。乳用中、肉用牛の我が国で飼われている品種は大部分は乳用牛ではホルスタイン種、肉用牛では黒毛和種、であります。その外主として飼われている品種及び、その特徴等は下記の表(表1)のとおりであります。

牛は私達にどのような恩恵を与えて来たかと考えますと、先

(大阪府農林技術センター)

表1.

品 種	原 産 地	品 種 の 成 立 立 ち	毛、色 特 徴	平均 体 重	年間平均産乳量(乳量率)
ホルスタイン	オランダ	家畜の祖先といわれる原牛から生まれたもので、北部ドイツにも同一系統種が飼養されている。オランダでは一時肉質を良くするため短角及びヘヤフォードの血液を入れたことがある	黒、白斑	♀ 900~1,200kg ♂ 500~700kg	4,500~7,000kg (3.0~3.5%) 脂肪球比較的小
ジャージー	英領領 ジャージー島	フランスのアルトン及びノルマンの両品種が混合し1943年に法律によって純粋繁殖が続けられた	褐色系斑の単色、鼻鏡周囲白色、尾房赤褐色、舌、蹄は黒色、腹、下肢淡色	♀ 500~650kg ♂ 300~400kg	3,000~4,500kg (5.0~5.5%) 脂肪球大
ブラウンスイス	スイス	昔から原産地の東南部地方で飼育されていた	灰褐色、暗灰褐色の単色、鼻鏡周囲白色、耳の内部、四肢内側は淡色、尾房黒	♀ 800~1,000kg ♂ 500~650kg	3,500~4,500kg (4.0~4.5%)
エアシャー	スコットランド 西海岸 エアシャー地方	短角、テイスウォーター、ホルダネス、ガンジー等多くの品種が混血され固定した	白地に赤褐色斑	♀ 700~900kg ♂ 450~500kg	3,500~5,000kg (3.5~4.5%)
ガンジー	英領領 ガンジー島	ジャージーと同じくフランス牛の子孫だといわれる	淡黄、赤黄又は褐色の地に白斑、一般に頭、下腿、四肢、尾房は白色	♀ 650~800kg ♂ 400~500kg	3,000~4,000kg (5.0~5.5%) 脂肪球大

(乳用牛の品種と特性)

品 種	主 要 産 産 地	品 種 の 成 立	特 徴	平均 体 重
黒 毛 和 種	中国、九州地方	明治以来フランスイシ、シンメンター、アバゲイオン、アンガス、サガ、短角等の輸入が行われて我が国の和牛種と交配され改良されてきたが各地域で改良方法も異なり導入血液も異なって各異特色ある和牛が産出された	黒色、肉質極めて良好ある肉中筋1筋 褐色、肉質良好だが肉毛粗粒に比べてやや劣る	♀ 430kg ♂ 730kg ♀ 450~480kg ♂ 730~800kg
黒 角 和 種	山口県阿武郡地方	明治初年東南部牛にショートホーンを交配して作出された	黒色、無角、早熟早肥で肉質がよい	♀ 500kg ♂ 800kg
日本短角種	岩手、青森、秋田、北海道	明治初年東南部牛にショートホーンを交配して作出された	赤褐色、散粒に過ぎない角付は粗毛に比べてやや劣る	♀ 500kg ♂ 700kg
ヘレフォード種	イギリス、アメリカ、カナダ、オーストラリア	イギリス、ヘレフォード州に原産し、アメリカにおいて無角ヘレフォードが作出された	赤褐色、白面、体質強健で散粒に過ぎない	♀ 600~700kg ♂ 750~1,000kg
アバゲイオン・アンガス種	イギリス、アメリカ、カナダ、ニュージーランド、オーストラリア	イギリス、スコットランドのアバゲイオン州、アンガス州に原産し、イギリス、アメリカ、オーストラリア等において改良がなされた	黒色、早熟早肥で肉質がよい、肉毛粗粒の成立に劣る	♀ 550~700kg ♂ 750~950kg
ショートホーン種	イギリス、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド	イギリス、アラム、ヨークシャー州で原産し、近畿繁殖によって改良された	暗赤褐色、粗毛、白色のものも一部ある。産乳量も多し、粗粒管理に耐え増体もよい。日本短角種の成立に劣る	♀ 600~800kg ♂ 800~1,100kg
シャロレー種	フランス、ソビエト、南米、イギリス、カナダ	フランスのシャロレー地方に原産し、以前は役牛利用に飼養されていたが、肉用種として改良が進められた	白色、クリーム単色、増体大きく、肉用種のためはもとより大型、赤肉多し、脂肪量は少ない。産乳量に広く利用	♀ 750~850kg ♂ 1,000~1,200kg

(肉用牛の品質と特性)

ず第一に我が国では最近その利用が減りつゝありますが、農地を耕し、また山林よりの木材の運搬、その他の重い荷物を運ぶ労力の提供、次には、そのふん、尿等の排泄物を肥料として利用することです。現在は化学肥料が発達して余り利用されなくなりましたが、大昔から最近まで貴重な肥料として米麦はもとより、そ菜、等農作物の生産に利用されました。明治以後になってからは、仏教思想の影響のために食用にされなかった牛肉が、欧米の生活様式の流入と、食生活を見習うようになり、その需用が漸次増大して我が国の食肉の中心となり、大いに皆様の動物蛋白栄養源になりました。次にその乳は牛乳として飲用され、乳幼児の哺乳に、病人の栄養に利用されていることは勿論ですが、第二次大戦後は特にバター、チーズ、ヨーグルト、アイスクリームとして、また製菓原料として、キャラメル、チョコレート、ビスケット等に利用され、栄養と嗜好を満足させてくれています。一方皮は、靴、装身具、衣服等広範囲に利用され、骨、角等は工芸品に細工されて私達の生活を潤し、また工業用原料として大いに利用されています。脂は食用、薬用、工業用に活躍しています。このように牛は生まれてから死ぬまで、なお死んでからまでも私達に種々な恩恵を与えて貢献しています。

現在我が国および大阪府の牛の飼養状況は表2のとおりであります。その表にありますように近年は肉用牛が漸次減少して乳用牛がこれに替っております。

表2. 牛飼養頭数の推移

(全 国) 単位: 4戸・4頭

種 別	乳 用 牛		肉 用 牛			
	飼 養 戸 数	飼 養 頭 数	飼 養 戸 数	飼 養 頭 数		
30	254	421	1.7	2,280	2,636	1.2
43	337	1,489	4.4	1,027	1,666	1.6
44	324	1,663	5.1	989	1,795	1.9
45	308	1,804	5.9	902	1,789	2.0
46	279	1,856	6.6	797	1,759	2.2
47	243	1,819	7.5	673	1,749	2.6

(大 阪 府) 単位: 1戸・1頭

種 別	乳 用 牛		肉 用 牛			
	飼 養 戸 数	飼 養 頭 数	飼 養 戸 数	飼 養 頭 数		
30	1,381	3,766	2.7	31,775	31,096	1
43	1,180	17,200	14.6	2,731	3,360	1.2
44	1,150	17,740	15.4	2,050	2,530	1.2
45	1,025	16,820	16.4	1,340	1,850	1.2
46	860	15,500	18.4	860	1,490	1.7
47	740	16,300	22.2	850	2,030	2.4

動物記者の目

子供動物園の建設を!

人工保育中のチビツライオン3頭が走り廻る特製さくの一角、赤い帽子の幼稚園児らしい女の子が寄ってきた。手を出すのかと思ったとたん、さくの網に近寄ったライオンにいきなり一蹴り、反対側に走ってさらに「ライダー、キック」。みかねて「動物いじめたらあかんよ」と声をかけると、少し離れたところにいた両親らしい二人がジッとにらみつけた。天王寺動物園の初秋の一コマ。

イヌやネコも飼えない団地族が急増、街角で子イヌをみつめて、泣き出すのはまだしも、蹴飛ばしたり棒を持って追いかける子供ばかり。天王寺でチビツ子無料化が実現したとき、生まれてまもないコブちゃん(フタコブラクダ)が歓迎に立ったのに、柔らかい毛に触れたのは、飼育係より早く出産を目撃した記者仲間と動物好きのカメラマンだけだった。生産と開発を急ぐあまり、「心」を忘れた大人たちが、子供たちから動物を愛する心を奪ってしまったようだ。

都会のアスファルト・ジャングルの中で、せめて子供と動物のスキンシップの機会をと東京・上野動物園には23年から子ども動物園があるとか。上京のついでにのぞいてみたら、ヤギやヒツジ、ペンギンなど7種が放し飼いされ、小学校入学前の幼児たちが小動物を抱いたり、エサをやったり。ヤギに足をかけられペンをかくチビツもいたが、楽しそうな歓声が上野の山にこだまし、ほんの少ししかみられないパンダ舎以上に子供たちの表情は満足そうだった。週三日は「子供の指導日」として入学生や幼稚園児の団体に管理をまかせるといふ、上野に限らず、名古屋・東山、京都、静岡などおもだった都市の動物園には、規模の大小はともかく子供動物園コーナーを備えている。天王寺にも同名のコーナーがある。だが硬貨を入れると動く電気仕掛けの動物ばかり。他園を知っている親子連れを裏切るコーナーだ。

今秋、子供動物園を設置した姫路市立動物園では、オープンから一週間のうちにウサギ24匹が、力いっ



(ライオン)

ぱい抱きしめられたり、ぬいぐるみと間違えて投げ飛ばされたりして死亡したという。それでも廃止の声は起こらず、必要性を再認識させただけ。エサの与えすぎでパンパンにふくらんだ腹をみて「動物虐待」の声もあるらしいが、しよせん動物園は人間のための施設。野生動物をオりに閉じ込めること自体が問題なのだから、そんな議論は空想家にまかせる以外にない。天王寺の子供動物園構想が話題になってから久しい。だが関係者の熱意が不足しているのか、実施見通しはさっぱり聞けない。とかく「うるおいのない動物園」といわれているだけに、一日も早く実現を、フィーリング時代といわれているとき、動物愛護の言葉を繰返すよりハダで感じさせる方が効果は大きい。子供動物園建設が本当の意味で市民に親しまれる“市民動物園”の第一歩かも。

(M. M生)

ヤブニラミ

◇天王寺動物園の収容動物は、11月末現在298種1288点。登録もれが14種17点。キシヤと称し、26年に入園、ボイラー室・2階の“クラブ室”に入居。日本の動物園では当園だけの珍種。夜行性強く、アルコール類やパイを好み、ときに奇声を発する。喜怒哀楽激しく種属不明。

(南大阪記者クラブ一岡)

なきごえ 昭和48年1月15日発行 (毎月1回15日発行) 第9巻第1号 (通巻89号)

編集 / 大阪市天王寺動物園

発行人 / 大阪市天王寺動物園協会 加藤寿雄

印刷所 / 株式会社 松村善進堂

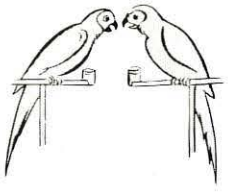
定価100円(送料共)

〒543 大阪市天王寺区玉水町2

電話 大阪 (06) 771-0201

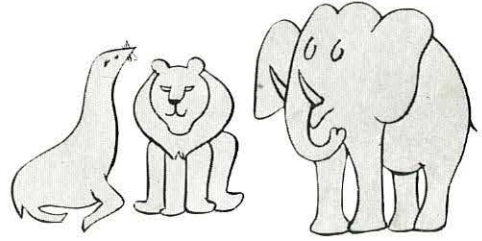
振替口座 大阪 37823

1年継続(12部)1,100円(送料共)



鳥獣輸入

全国動物園水族館御用達



- ・医学実験用動物
- ・愛玩犬、猫直輸入
- ・宣伝用、テレビ用、貸動物
- ・教材用鳥獣剥製販売
- ・原色世界雑類図鑑(34種1枚もの)要郵便券150円・鳥獣価格表100円

有限会社 吉川商会

本社 神戸市生田区中山手通三丁目二八番地

電話(078)221-8195・221-1517

飼育場 神戸市葺合区神仙寺通三丁目一番地

電話(078)241-3494



全糖

- 合成甘味料・合成保存料・合成糊料・合成着色料はっさい含まれていません。



雪印ヨーグル

パイン・オレンジ・フルーツカクテル

各140c.c.=60円